

虫の話だと思ったら、人間の物語だった。

✧ 1996年カンヌ映画祭高等技術賞受賞 ✧

1996年セザール賞5部門受賞

MICROCOSMOS

ミクロコスモス

GALATÉE FILMS ジャック・ペラン・プレゼンツ 日本語字幕：椎名 誠

●監督・撮影・脚本：クロード・ヌリダニー CLAUDE NURIDSANY / マリー・ペレンヌ MARIE PÉRENNOU ●製作：ジャック・ペラン JACQUES PERRIN ●監修：奥本大三郎

ORIGINAL MUSIC OF THE FILM MICROCOSMOS AVAILABLE AT AUVIDIS / TRAVELLING REFERENCE K 1028

提供：KUZUIエンタープライズ / PIONEER LDC / ゼオ サントラ盤：ホリケラムIMS 配給：KUZUIエンタープライズ



虫の話だと思ったら、人間の物語だった。

1996年カンヌ映画祭高等技術賞受賞
1996年セザール賞5部門受賞

1996年カンヌ映画祭で上映されるや否や、大センセーションを巻き起こし、超クローズアップで現れる虫たちのパフォーマンスに話題騒然!観客たちは、そのダイナミックなミクロの画像とミクロの音響のクオリティの高さに、すっかり魅了されてしまった。

大自然で生きる虫たちの壮大なドラマを美しい映像と華麗な音楽で描き出したナチュラル・フィクション。

フランス 公開1週目 ボックス・オフィス1位!
12週目興行収入 \$18,270,526

ベルギー 公開1週目 ボックス・オフィス1位!
10週目興行収入 \$1,078,959



もう、驚くほど美しい世界! THE NEW YORK TIMES / Janet Maslin
映画ファンの夢、ついに実現!! NEW YORK POST / Larry Bernard
虫たちの魅力にどンドン引き込まれる! 虫と同じ視点に導いてくれる映画 INTERVIEW MAGAZINE / Gregor Ehrlich

準備: 15年「観察日記」数十冊
構想 (カメラや照明機材のデザイン・制作): 2年
撮影: 3年
編集: 6ヶ月
フィルムのリール: 80キロメートル (映画の長さの40倍)



「科学と芸術の幸福な調和」

無限には二つの方向がある。大きい無限と小さい無限である。一方に宇宙と星の世界があり、もう一方に、虫やバクテリアや分子や原子の世界がある。

この映画の中では、時間と、ものの大きさの尺度が自由自在に変えられ、身近な自然の中の、主として昆虫の無限の世界が、ほとんど彼ら自身が体験するように映し出されている。

地球をひとつの惑星として見る視点と、叢を大ジャンクルとして見る視点の両方がここにはあるのだが、カメラは信じられないほどの精度で、虫の世界を解明する。

たとえば、一匹のアリにとって、草の葉の上に置いた露の玉は、なんと強靱な“皮”を持った大きな球体であることか。表面張力によって形成されたこの球体は、水の入った大きな厚いビニール袋のようになっている、水を飲もうと押しついても、いっか破れない。そして何かのはずみで“すぼん”とその中に取り込まれてしまうと、今度は虫を封じ込める球となって、水が蒸発するまで外に出ることができなくなるのである。

テントウムシが、トゲだらけのバラの茎に付いているアブラムシをむさぼり食う。アリが噛みつきこうとしても、その丸い体はつるつるして、まるで硬質プラスチックで出来ているかのように歯が立たない。その様が、「なるほど」と唖りたくくなるほど詳細に、迫力をもって描かれている。

しかし、特筆すべきは、映画全編を貫く芸術的なセンスであろう。のそのそ歩き、闘うカブトムシやクワガタムシを、ソウヤサイのような映像に仕立てることは今までにも行われてきたけれど、イトトンボやカゲツムリをこれほどファンタスティックに美しく、また艶かく描いた映画はかつてなかった気がする。殊にこの“愛し合う”二匹のカタツムリの場面などは、まさに“発禁もの”である。音響は単なる効果音では断じてなく、自然の音を題材にした見事な現代音楽である。

監修: 奥本大三郎

スタッフ

監督+脚本+撮影: クロード・ニルザニエ/マリー・ブレンヌー
編集: マリー・ジョゼフ・ヨヨット
音響: フィリップ・バルボ/ベルナル・ルルー
音響制作: ロラン・カグリオ
製作総指揮: ミシェル・フォール/フィリップ・ゴティエ
製作: ガラテ・フィルム/ジャック・ペラン
オリジナル音楽: プリュノ・クール
歌: 小林真理
監修: 奥本大三郎
日本語字幕: 椎名 誠
イラスト: 沢野ひとし

1996年/フランス映画/1時間13分/ドルビースRD/カラー/ヨーロッパビスタ/4巻: 2.115m/サントラ盤: ポリグラムIMS

提供: KUZUIエンタープライズ/ PIONEER LDC/ ケオ 配給: KUZUIエンタープライズ

特別鑑賞券好評発売中 一般券 ¥1,600 ベア券 ¥3,000 (当日 ¥1,800のところ)

宇宙の時をこえて
また今日も地球に朝がくる。
大地に、海に、街に、草原に。
草原のささやきが聞こえる。
ここは私たちのよく知っている。
でも本当は殆ど知らない。
もうひとつの宇宙だ。
ここにすむ生き物にとつて
沢山の雑草は果てしないジャングルで、
石ころは山、
水たまりは海、
時の流れもまるでちがっている。
時間はゆっくりすすみ、
ひとつの命がひとつの季節の中で
生まれ、
消えていく。
この宇宙に近づくには
まずそつと、息をひそめなければならない。



日本語字幕

椎名 誠



沢野ひとし



かつて昆虫少年だった頃(いまでも時折捕虫網を振るったりしているが)、自分も虫のつもりになって、森や草原のなかで彼らと戯れたものだ。虫のつもり…つまり、彼らチョウやトンボやセミやカブトムシたちのサイズに同化するように、周りの樹々や草の葉を眺め、動きや気持を読みとりながら、森の小径のなかを歩んでゆく。そうしないと彼らは発見できないし、うまく捕えることもできない。

真夏の砂利道に座りこんで、巣にエサのミズを選びこもうとするアリたちの行進をじっと眺めていたことがあった。垣根のカラタチの枝で羽化したばかりのアゲハチョウの翅が広がっていき様を、しばらく息をのんで見とれていた—という記憶もある。

そういう少年時代の〈回路〉を大方のオト



なはずは失ってしまふ。いつしか、小さな虫たちの動きを見る視線が退化してしまふ。

「マイクロコスモス」は、そんなありし日の虫寄りの目を甦らせてくれる、秀れたドキュメンタリー映像である。舞台はフランスの田園地帯だが、ここに登場する昆虫たちは、ナナホシテントウ、キアゲハ、イトトンボ、ヒゲナガハナバチ…といった日本の都市周辺でもごく普通に見られる種類、である。あたりまえの虫たちの、ちょっとした仕種や癖を、実に執念深く、丹念に撮っている。

こんな世界が、あなたの住むニュータウンの脇っちょの草むらにも、実は存在しているのである。しかしこれほどまでにディティールを見事に撮影するとは…もしやこの映画の監督も彼らと同じ「昆虫」なのではないだろうか。

泉 麻人

今秋ロードショー

JR有楽町日比谷口前・有楽町ビル内
有楽町スバル座
03(3212)2826

各回入替制
新宿武蔵野館
シネマ・カリテ
03(3354)5670